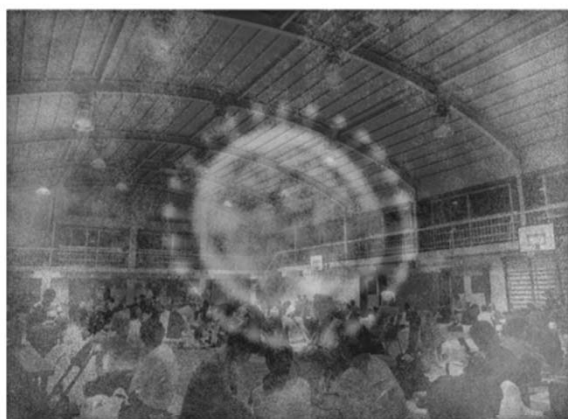


新型コロナウイルス感染症流行時の 災害と避難環境を考える手引き

(地方自治体編)

～ Living with Corona ～



第一版

編著 新型コロナウイルス感染症と災害避難研究会

松尾一郎 東京大学大学院情報学環総合情報研究センター客員教授
根本昌宏 日本赤十字北海道看護大学看護薬理学領域教授
植田信策 石巻赤十字病院副院長 呼吸器外科医師
森本真之助 伊勢赤十字病院救急部 医師
川口隆尊 CeMI 環境・防災研究所 上席研究員

1. はじめに

2020年1月15日は、国内で初めて新型コロナウイルス感染症患者が神奈川県で確認された日であった。その時を起点に私たちの生活形態も様変わりしてしまった。このことを予想できた人は、感染症医療従事者であったと思う。ほとんどの国民は、それこそ「想定外」であった。

この新型コロナウイルス感染症（以下、「新型コロナウイルス感染症」という。）は、近代社会にとっても国難災害に匹敵する。国の専門家会議は、感染対策をしないと、国内では重篤患者が約85万人に上り、その半数の40万人以上が死亡すると予測した。一方、近い将来発生すると懸念されている南海トラフ巨大地震に関する国の被害想定では、事前対策がなければ、揺れと津波により犠牲者は32万になると予想している。

新型コロナウイルス感染症による人的被害は、近い将来発生することが確実視されている大規模災害以上の国難災害になるということである。

新型コロナウイルス感染症は、治療薬やワクチンが普及されるまで、完全な沈静化は難しい。少なくとも年単位の時間がかかる。それまでの間、巨大台風は襲来するし、突発的に地震は発生するのである。

つまり「新型コロナウイルス感染症流行時」に「自然災害による大量避難」が重なることになり、新型コロナウイルス感染の拡大に繋がるのが問題である。たとえば首都直下地震が発生すると都県の避難者数は、720万人と推定されている。720万人が三密になるとどうなるか、横浜で起こったダイヤモンドプリンセス船内の感染拡大事例から想像すると、災害避難における感染防止対策は、いま最大限に備えるべき取り組みである。そこでCeMI環境・防災研究所は、筆者の監修のもと全国5,261名を対象に新型コロナウイルス感染症下の災害避難の行動や意識をインターネット調査した。（2020年4月10日～24日）

まず新型コロナウイルス感染症に対する恐怖感を聞いた。怖い、とても怖い、94%でほとんどの人々が恐怖感を感じている。

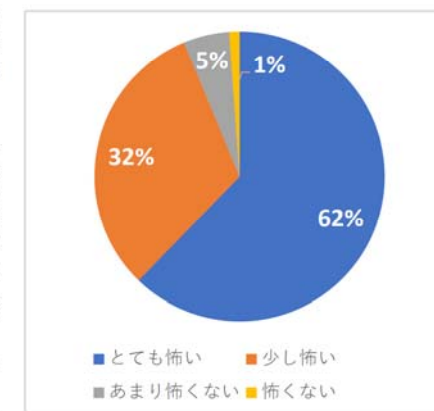


図1 新型コロナウイルス感染症へ考えていること

この新型コロナウイルス感染症が流行する中で、地震や水害時の避難行動が影響するか聞いたところ、73%が影響すると回答した。

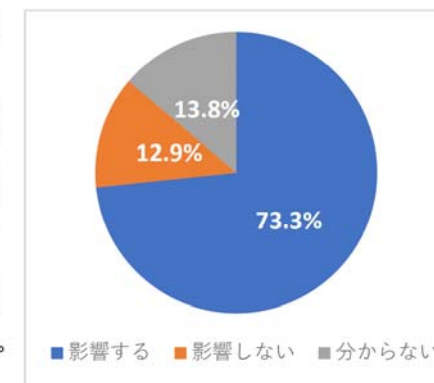


図2 感染症流行時の避難行動への影響

さらに避難行動に影響のあると回答した人々(3,766人)に、どのような影響が出てくるかを聞いた。

これまで行った避難行動内容から、新型コロナへの感染リスクを怖れて、行動変容は生じる。

避難所に行かない(21.8%)、様子見て避難先を変える(39%)と答えている人々がいた。それと個別空間が確保できる車避難を選択した人が41.7%であった。また感染防止対策をして避難所に行くとした人が30%もいる。つまり新型コロナ感染症が流行している状況では、多様な避難形態をとりうるということが分かった。

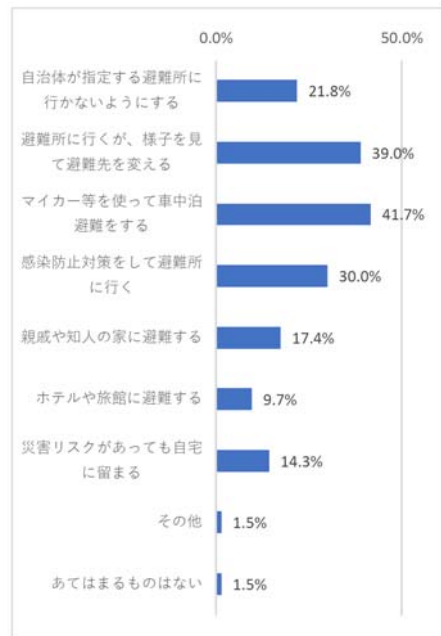


図3 避難行動に影響すること

避難所に行かなくなる人が増える中で、避難所での感染防止対策を図ることで避難するかどうかを聞いた。

避難するは、18%。対策の内容によって判断するが、63.4%であった。

このことは、指定避難所などにおける徹底的な感染防止対策が重要となることは言うまでもない。

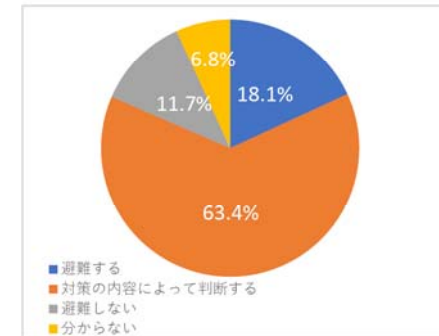


図4 避難所で感染防止対策が行われていれば避難するか

これまでの災害時の指定避難所は、3K(きつい、きたない、感染リスク)と、三密の典型であった。新型コロナ感染症は、感染力が強く、避難所に集まる高齢者への感染リスクは高い。

避難所避難では、感染防止対策は必須である。また、これを機会に感染防止対策を進めることは、清潔でセパレートな空間が保証される新たな避難所環境に変わる可能性もあると考えている。

避難は、避難所避難のみではない。在宅が安全であれば、「動かない避難」もある。一時的に車空間を活用する青空避難もある。より避難環境を改善することや、個別空間の必要性があるとなれば、ホテルや空き家などの活用もあると思っている。いわば多様な「分散避難」である。

災害は、地域で発生する。その意味で新型コロナ感染症蔓延時の新たな時代において、国難災害以上の「コロナ災害」への拡大防止のための地域毎の防災協働体制の整備とその新たな避難環境の仕組みづくりが急務と考えている次第である。

のが現状である。

4. 新たな時代の分散避難

(1) 感染制御の基本

研究機関や保健当局は、新型コロナウイルスそのものの挙動・特性および感染のメカニズム、症状などを、現在進行形で伝えている。それをかみ砕いた形で日常生活における注意事項として、わかりやすく「三密を防ぐ」とこととされ、これが基本である。

「災害発生時の避難においてもこの三密を防ぐこと」として、内閣府、厚労省などから通達が出されているが、それでは、各自治体はその地域の特性に合わせてどのように防ぐのか。

- これを考えるにあたり、押さえておくべきは、
- ①飛沫感染の中には、エアロゾルとして空気中を漂うウイルスからの感染もあること。
 - ②紙や衣類、ステンレス、プラスチックの表面では相当時間ウイルスが生き残り、接触感染を起こすこと。^{※3}
 - ③共用の多いトイレで、ドアノブや便座、排せつされた便やその飛沫からの感染もあること。^{※4}
- である。これらを考慮して、いかに感染しない避難を実現していくかを論じていく。

(2) 分散避難

新型コロナウイルス感染症に留意した多様な避難の概念を下図に示す。



図6 新型感染症に留意した多様な避難

新型コロナウイルス感染症に留意した多様な避難

監修 松尾一郎@東大、根本昌弘@日赤北海道看護大



「自らの命は自らが守る」意識を持ち、適切な避難行動をとりましょう

新型コロナウイルス感染症が収束しない中でも、
災害時には、**危険な場所にいる人は
避難することが原則**です。

知っておくべき5つのポイント

- 避難とは[難]を[避]けること。
安全な場所にいる人まで避難場所に行く必要はありません。
- 避難先は、小中学校・公民館だけではありません。安全な親戚・知人宅に避難することも考えてみましょう。
- マスク・消毒液・体温計が不足しています。できるだけ自ら携行して下さい。
- 市町村が指定する避難場所、避難所が変更・増設されている可能性があります。災害時には市町村ホームページ等で確認して下さい。
- 豪雨時の屋外の移動は車も含め危険です。やむをえず車中泊をする場合は、浸水しないよう周囲の状況等を十分確認して下さい。



今のうちに、
**自宅が安全かどうかを
確認しましょう！**



ハザードマップ

検索

避難行動判定フロー

スタート！

あなたがとるべき避難行動は？

ハザードマップ※で自分の家がどこにあるか確認し、印をつけてみましょう。

※ハザードマップは浸水や土砂災害が発生するおそれの高い区域を着色した地図です。着色されていないところでも災害が起こる可能性があります。

家がある場所に色が塗られていますか？

いいえ

色が塗られていなくても、周り比べて低い土地や崖のそばなどにお住まいの方は、市区町村からの避難情報を参考に必要に応じて避難してください。

はい

災害の危険があるので、原則として※、自宅の外に避難が必要です。

例外

※浸水の危険があっても、
①洪水により家屋が倒壊又は崩落してしまうおそれの高い区域の外側である
②浸水する深さよりも高いところにいる
③浸水しても水がひくまで我慢できる、水・食糧などの備えが十分にある場合は**自宅に留まり安全確保することも可能です。**
※土砂災害の危険があっても、十分堅牢マンション等の上層階に住んでいる場合は**自宅に留まり安全確保することも可能です。**

ご自身または一緒に避難する方は避難に時間がかかりますか？

いいえ

はい

安全な場所に住んでいて身を寄せられる親戚や知人はいいますか？

はい

いいえ

警戒レベル3が出たら、安全な親戚や知人宅に避難しましょう（日頃から相談しておきましょう）

警戒レベル3が出たら、市区町村が指定している指定緊急避難場所に避難しましょう

安全な場所に住んでいて身を寄せられる親戚や知人はいいますか？

はい

いいえ

警戒レベル4が出たら、安全な親戚や知人宅に避難しましょう（日頃から相談しておきましょう）

警戒レベル4が出たら、市区町村が指定している指定緊急避難場所に避難しましょう